

徳川大坂城東六甲擣石場IV

# 岩ヶ平石切丁場跡

—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財事前調査の記録と成果—

91

水

2005年9月

芦屋市教育委員会

徳川大坂城東六甲採石場IV

# 岩ヶ平石切丁場跡

—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財事前調査の記録と成果—



2005年9月

芦屋市教育委員会

# 序

人はその誕生以来、石を生活の中に取り込んで豊かな文化を築いてきました。大昔は道具を多くの種類の石器でまかない、古墳には大量の葺石を使用し、墓室として竪穴・横穴の石室をこしらえ、寺院建築には土台ともいえる基壇や礎石に豊富な石材を使ってきました。鎌倉時代以降に活発となる石造品もその代表的なものです。

この芦屋の土地は背山として花崗岩から成る六甲山地を控える関係もあって、通常は「御影石」の名で親しまれる六甲花崗岩が豊富な石材として、ひとびとに広く用いられてきました。

その利用の歴史は、原始・古代から中世を経て、近世・近現代へと引きわめて長い足どりですが、ひときわむ注目されるのが現存大阪城の石垣の約半数を供給したといわれる奥山や城山、六麓山から岩間にかけての広大な花崗岩石切場の存在です。それは今から400年ばかり前の生産遺跡とされ、最も古くから分布調査や発掘調査が進められてきた文化財保護行政の上からも、いまや斯界から脚光を浴びる存在となっています。

今日、大阪の市街地高台に君臨する大阪城の雄姿は、豊臣秀吉の築城した大阪城ではなく、関ヶ原の合戦や大坂冬夏の陣を契機に台頭した徳川氏の大改築によるものです。元和6年(1620)から開始されたこの再築大阪城は、西国六十四家の大名が総出でかかわった「天下普請」で、17世紀の巨石建造物としては世界最大の大きさを誇るものとして注目されています。

その生みの親とも言える石材切出の丁場が、この芦屋に大規模な姿で出現しました。本書は土地造成開発で失われるこうした石切丁場遺跡の記録保存と移設保存した石垣石材の由来を後世に証す発掘調査の報告書です。調査では糺余曲折があり、さまざまな難問につきあたりましたが、発掘終了後1年満たない早期にこうした形を成して上梓できたことを心から慶んでおります。

事業者のウエスト・ハウス株式会社はじめ、多くの機関と人々にお世話とご協力をいただきました。文化庁・兵庫県からは行政的見地から多大なご指導とご教唆を得ることができ、また、学会、研究者、市民団体からも激励や貴重なご意見を賜ることができました。この調査に関わった多くの方々に心から感謝するとともに、また一つ郷土芦屋の文化的資源の豊かさとその記録を公にできましたことに対し、厚く感謝申し上げます。

平成17年9月30日

芦屋市教育長

藤原周三

# 例　　言

1. 本書は、芦屋市文化財調査報告第 60 集（正報告書）であり、平成 16・17 年度事業として芦屋市教育委員会の責任の下、原因者との事業協定に基づき、今年度上半期を期限に公刊するものである。
2. 本書は、芦屋市教育委員会が民間宅地造成事業に伴い事前調査を実施した徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群並びに八十塚古墳群の確認調査及び発掘調査結果の正報告書である。調査期間は平成 16 年 5 月 6 日～10 月 29 日であり、延日数およそ 90 日を費やして行った。遺跡は、兵庫県教育委員会が平成 12 年 3 月に公刊している『兵庫県遺跡地図－第 1 分冊－（発掘調査の手引き・遺跡地名表）』の地名表幅 P 11 に「遺跡番号 70009 八十塚古墳群」（種類：古墳、時代：古墳）、「遺跡番号 70049 岩ヶ平刻印群」（種類：生産遺跡、時代：近世）として掲げられている。また、位置や範囲については、同『兵庫県遺跡地図－第 2 分冊－（遺跡分布地図）』の図版 96（国土地理院発行 2 万 5 千分の 1 地形図複製「西宮」）に周知の埋蔵文化財包蔵地として記載されている。同遺跡は、〔芦屋市教育委員会 2001b〕でも周知されている。なお、書名は後者の成果を尊重し、遺構の性格を勘案して、「岩ヶ平石切丁場跡」とした。
3. 調査地は、兵庫県芦屋市岩園町 5 番地他 24 箇に所在する。
4. 確認調査および本発掘調査は、芦屋市教育委員会が兵庫県教育委員会の指導・助言の下、調査主体となり、社会教育部文化財課の主査森岡秀人（学芸員）と嘱託坂田典彦（学芸員）両名が担当した。調査・整理事業に係る事務は、文化財課長西川孝夫、主査（総務担当）田中尚美【以上、平成 16 年度】、生涯学習課課長石濱昭正、課長補佐中戸博幸、主事（総務担当）春木和子【以上、平成 17 年度】が主担した。
5. 確認調査および本発掘調査の実施に際しては、下記の行政機関の方々から指導・助言を受けた。  
坂井秀弥（文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官）福宜田佳男（同文化財調査官）岡田康博（同文化財調査官）松下信一（兵庫県教育委員会文化財室長）岡崎正雄（同課長補佐兼審査指導係長）平田博幸（同主査）
6. 発掘調査の過程で兵庫県文化財保護審議会史跡埋蔵文化財部会、芦屋市文化財保護審議会の下記の委員のみなさまから調査の方法や成果、遺跡の取扱いにに関して、御教示、御助言、御指導を賜った。  
石野博信 和田晴吾 寺澤淳子（以上、兵庫県文化財保護審議会史跡埋蔵文化財部会委員）  
村川行弘 多淵敏樹 神木哲男（以上、芦屋市文化財保護審議会委員）
7. 現地の発掘調査および出土遺物・資料整理作業は、森岡・坂田が担当し、下記の調査・整理補助員が従事した。  
天羽育子 池田計彦 倍 貴大 高橋美代子 仲谷由利子 山本麻理 前田礼子
8. 本書の執筆は、森岡・坂田が担当し、本文書作業では国政恭子（生涯学習課臨時の任用職員・文化財事務担当）が協力した。執筆分担の責は目次および担当節・項末尾に掲げたとおりである。
9. 現地調査および調査前後の検討・報告書の作成において、下記の方々に専門的な立場や地元の経験的な視野から献身的なご教示、ご協力、ご支援を賜った。所属と名前を記し、深く感謝の意を表する。（5・6・10 で掲げた方は、重複するので除いた方がいる）  
浅岡俊夫（六甲山麓遺跡調査会）浅野 級（静岡市立登呂博物館）荒木幸治（赤穂市教育委員会）有馬 伸（宮内庁書陵部陵墓課）伊井孝雄（文化財保存全国協議会・加茂遺跡を守る会）勇 正広（兵庫県埋蔵文化財パトロール委員）石部正志（五條市立文化博物館）伊藤廣之（大阪歴史博物館）今井 克（文化財保存全国協議会）植木 友（篠山市教育委員会）ウェルナー・シュタインハウス（ドイツ考古学者・「曙光の時代」プロジェクト代表者）梅崎恵司（財団法人北九州市芸術文化振興財團埋蔵文化財調査室）大久保徹也（徳島文理大学）大国正美（神戸深江生活文化史料館）太田秀春（東北大東北アジア研究センター）大道和人（財団法人滋賀県文化財保護協会）大脇 肇（近畿大学）小笠原好彦（滋賀大学）奥村信一（株式会社都市・景観設計）葛野 直（関西文化財保存協議会）加藤克郎（石川県教育委員会金沢城研究調査室）加藤一郎（宮内庁書陵部陵墓課）神谷正弘（高石市教育委員会）川口宏海（大手前大学・日本考古学協会）川西宏幸（筑波大学歴史・人類学）河野克人（篠山市教育委員会）岸本直文（大阪市立大学）岸本雅敏（富山県埋蔵文化財センター）喜多貞裕（株式会社総合文化企画）北垣聰一郎（元 東大阪短期大学）喜谷美宣（大阪女子大学）桐山秀穂（財団法人古代学協会）黒田慶一（財）大阪府文化財センター）小坂博一（森茂子スケッチ画グループ）

）小貫 充（寝屋川市の歴史と文化を考える会）柴原永遠男（大阪市立大学）佐久間貴士（大阪樟蔭女子大学）櫻木 潤（関西大学大学院）佐古和枝（関西外国语大学）芝野圭之助（大阪府立狭山池博物館）鈴木重治（日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会）関川尚功（奈良県立橿原考古学研究所資料室）関野 豊（神戸市教育委員会）高木恭二（宇土市教育委員会）高田 徹（城郭談話会）高橋方紀（岐阜市歴史博物館）滝川重徳（石川県教育委員会金沢城研究調査室）竹村忠洋（芦屋市教育委員会）竹田宏司（玉名市教育委員会）田嶋明人（石川県教育委員会金沢城研究調査室）田中一広（日本考古学協会）壇上重光（神戸市文化財保護審議会）辻 康男（パリノ・サーヴェイ株式会社）都出比呂志（大阪大学）坪井清足（財団法人元興寺文化財研究所）鈴本幸夫（高浜市郷土資料館）寺岡 洋（むくげの会）寺澤 薫（奈良県立橿原考古学研究所）寺前直人（大阪大学）戸潤幹夫（石川県立博物館）徳出誠志（宮内庁書陵部陵墓課）富田和気夫（石川県教育委員会金沢城研究調査室）富山直人（神戸市立博物館学芸課）中村博司（大阪城天守閣）西川禎亮（中村石材工業株式会社）西川寿勝（大阪府教育委員会）西谷 正（伊都国歴史博物館）乗岡 実（岡山市デジタルミュージアム）白谷朋世（芦屋市教育委員会）橋口尚武（日本考古学協会）馬場英明（大阪府立狭山池博物館）濱野俊一（香芝市二上山博物館）早川 圭（彦根市教育委員会）伴野幸一（守山市教育委員会）東潮（徳島大学）概本誠一（大手前大学）廣瀬永津子（香川県牟礼町石の民俗博物館）廣瀬岳志（宇和島市教育委員会）福井英治（尼崎市立田能資料館）福尾正彦（宮内庁書陵部陵墓課）福岡澄男（財団法人大阪府文化財センター）藤本史子（大手前大学）藤川祐作（芦の芽グループ）藤原清尚（高砂市教育委員会）古川久雄（撰陽文化財研究所）北條芳隆（東海大学）堀内明博（財団法人古代学協会）堀口健三（吹田市立博物館）松田順一郎（財団法人東大阪市文化財協会）松田常子（皇子山遺跡を守る会）松田直則（高知県教育委員会）三澤 雄（毎日放送報道部ニュースセンター）南垣秀樹（徳川大坂城東六甲探石場遺跡の保存を求める市民の会）宮川渉（文化財保存全国協議会）百瀬正恒（日本考古学協会）安村俊史（柏原市歴史資料館）山上雅弘（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所）山岸良二（千葉県東邦高等学校考古学部）山下晃誉（城郭談話会）山成孝治（毎日新聞社）山村 薫（城郭談話会）山本三郎（兵庫県教育委員会）山本徹男（市内遺跡ビデオ撮影担当）山本尚子（古代学研究会）山本博利（姫路城城郭研究室）山本 誠（兵庫県教育委員会）湯本 整（香芝市二上山博物館）吉村真樹子（大阪大学大学院）ロラン・ネスブルス（フランス考古学者・ソルボンヌ大学）渡辺 武（前 大阪城天守閣）渡辺 昇（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所）渡部裕明（産経新聞社）

〈以上、順不同〉

10. 本書に使用した写真的うち、表紙・図版3～7の8点については、梅原章一氏（日本写真家協会）に専門撮影を依頼した。図版1の航空写真是、芦屋市広報課（平成5年、平成14年撮影）の提供による。また、岩石や地質に関しては、奥田尚氏（奈良県立橿原考古学研究所共同研究員・大阪市立大学大学院）と先山徹氏（兵庫県立人と自然の博物館・兵庫県立大学）にその鑑定など多大な協力を賜った。挿図では、芦屋市教育委員会既刊の報告書より引用・再掲したものがあるが、それらのうち、第22～25図、第121図の一部は古川久雄氏の撮影したものを原版ではなく、掲載版を転載させていただいた。さらに、第137-147～149図は、藤川祐作氏撮影の写真紙焼を直接提供いただいた。それぞれのご高配に対し、厚く感謝する。大阪城天守閣関係者からも現地においてひとかたならぬ御教授があった。とくに現館長の中村博司氏、前館長の渡辺武氏には、お世話になった。近年の城郭石垣復原、石切丁場全体の調査や成果に関しては、北垣聰一郎氏から多くの御教示、御助言をいただいた。
11. 確認調査・発掘調査並びに整理作業費や報告書印刷費は、すべて事業者のウエスト・ハウス株式会社が負担した。記してその協力に感謝したい。また、現場の発掘作業は、安西工業株式会社に作業委託した。
12. 本書名称および文中で大阪城と大坂城とを使い分けで記載した。これは、当時の古文書や絵図等に見られる用例に拠った。歴史的な理由は諸説みられるが、字義の縁起直しによるものとされる。
13. 本書の編集は、森岡秀人・板田典彦が担当した。

# 本文目次

序	芦屋市教育長 藤原周三
例言	
本文目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	
I 水戸城に至るいきさつ	
(1) 発掘調査前の協議経過と工事着手の経緯	(森岡秀人) ..... 1
(2) 事業地の工事損壊とその確認調査	(森岡) ..... 3
II 遺跡をとりまく環境	
(1) 地理・地質的環境の中での調査地	(森岡・坂田典彦) ..... 5
(2) 歴史的環境と芦屋	(森岡・坂田) ..... 11
III 德川大坂城の石垣と石切技術	
(1) 德川大坂城とその採石場	(森岡・坂田) ..... 17
① 大坂城再築に至るいきさつ	
② 德川大坂城にかかる採石場	
(2) 石切技術をめぐる用語について	(森岡・坂田) ..... 22
① 母岩(母材)と調整石・準調整石・調整石目的材	
② 矢穴と矢穴列・矢穴痕・矢穴列痕	
③ 矢穴石と矢穴痕をもつ削石と刻印石	
④ 矢場取り(二段彫り・溝彫り・ヤバトリ)	
⑤ 段丘疊層と適材の選択	
⑥ 花崗岩と採石活動	
IV 発掘調査の成果	
(1) 調査の方法と経過	(森岡・坂田) ..... 26
① A地区の現況と確認調査・本発掘調査	
② B地区の現況と確認調査	
③ C地区の現況と確認調査・本発掘調査	
④ D地区の現況と確認調査	
⑤ E地区の現況と確認調査	
(2) 調査日誌抄録	(森岡・坂田) ..... 31
(3) さまざまな遺構	(森岡・坂田) ..... 43
① 各地区的調査概況	
A. A地区的成果	
B. B地区的成果	
C. C地区的成果	
D. D地区的成果	
E. E地区的成果	
② 遺構の種類とその検出例	
A. 石切丁場	
谷を利用した丁場 作業面(テラス面)を確保する丁場	
C. 地区台地面の削石状況	
点在型丁場	

B. 石曳き道（石材搬出ルート）	
搬出ルートとしての谷1の位置づけ	確認調査第8地点の成果
C. 採石土坑	
第11調査地点	
D. 火化遺構	
16-⑤トレンチ推定鍛冶炉跡	C-II B区焼土坑など
E. その他	
古墳状隆起確認調査の結果	遺構を伴わないトレンチの成果と近世以降の石垣
C地区造成盛土以下の確認調査	
(4) 出土遺物について	（森岡・坂田） .....115
① A地区出土遺物	
② B地区出土遺物	
③ C-Ⅲ区（第19地点①トレンチ）コッパ面出土遺物	
④ C地区石垣内出土遺物	
⑤ C地区盛土および包含層（第20地点⑤トレンチ清理土を含む）出土遺物	
⑥ 出土地不明表採遺物（旧朝比奈氏所有地内）	
(5) 石工の道具〔参考資料〕	（森岡） .....121
(6) 小結	（森岡・坂田） .....123
① 旧地形復元にみる石切丁場と近世新田開発の展開	
② 石切丁場の微地形立地と石材裁断技法の諸特徴	
③ 出土遺物の年代と採石遺構の時期	

## V まとめと今後の課題

(1) 石切技術の革新とその具体例	（森岡・坂田） .....127
(2) 矢穴・矢穴痕の多様性と機能的位置づけ	（森岡・坂田） .....136
(3) 検出刻印をめぐる二、三の問題	（森岡・坂田） .....161
(4) 岩ヶ平刻印群を中心とする石曳き道の推定と船出し	（森岡・坂田） .....173
(5) 戸田氏鉄による尼崎藩治政と東六甲の徳川大坂城採石場	（森岡） .....175
(6) 総括	（森岡） .....179

遺跡調査をめぐる動きの記録〔抄録〕

引用・参考文献

付章 岩ヶ平石切丁場跡の石材の石種…奈良県立橿原考古学研究所共同研究員・大阪市立大学大学院 奥田 尚  
あとがき

## 挿 図 目 次

第1図	着手工事発見日の現場状況（北から）	2
第2図	着手工事発見日の状況（谷1斜面付近）	2
第3図	工事発見日の掘削坑（C地区付近）	2
第4図	工事の中断協議の状況	2
第5図	遺跡損壊確認調査風景（谷2付近）	3
第6図	削平・切土部分の調査風景（C地区）	3
第7図	新発見の矢穴石確認状況（42号石材）	3
第8図	露呈石材略測風景（A地区）	3
第9図	兵庫県と芦屋市の位置	5
第10図	東六甲採石場における刻印群の分布（1/50,000）	6
第11図	六甲山地東南麓地域の地質概要図（1/50,000）	7
第12図	徳川大坂城と東六甲石切丁場の位置および海上運搬ルート	8
第13図	節理に沿った風化とバットランドの形成	10
第14図	六甲山地東部における六甲花崗岩の節理間隔	10
第15図	芦屋市内主要遺跡分布図	11
第16図	吉岡昭作成の「岩ヶ平遺跡地図」（昭和17年）	12
第17図	市街地東部の遺跡分布図（1/6,000）	13
第18図	北向地蔵尊（弓木町）	14
第19図	天上川八幡神社（参道沿い）	14
第20図	八幡神社内（神戸市灘区八幡町）	14
第21図	弓弦羽神社踏石（御影町郡家）	14
第22図	吳川遺跡1号石材（小浜藩京極家）	15
第23図	吳川遺跡2号石材（赤穂藩池田家）	15
第24図	吳川遺跡6号石材（松江藩堀尾家）	15
第25図	吳川遺跡3号石材（松江藩堀尾家・長州藩毛利家）	15
第26図	現在の大坂城の天守閣と石垣、外濠、佛観	17
第27図	豊臣朝と徳川期の大坂城立面観比較（岡本1983から転載、一部改変）	19
第28図	石のふるさと	20
第29図	矢穴のみられる「残念石」（東大阪市善根寺町）	20
第30図	花園中央公園にある刻印石（東大阪市）	20
第31図	天狗岩丁場から城ヶ島を望む	21
第32図	天狗岩丁場(1)	21
第33図	天狗岩丁場(2)	21
第34図	豆腐石丁場	21
第35図	八人石丁場	21
第36図	城の石垣と各種用石	22
第37図	矢穴各部の名称と法量測定基準	23
第38図	矢穴の基本型式分類模式図	23
第39図	矢穴石、矢穴痕をもつ割石、刻印石	24
第40図	トレンチ配置図（1/1,000）	27 · 28
第41図	発掘開始当初の様子（第10地点、北から）	31
第42図	地形測量風景（第11地点、南から）	31
第43図	日本考古学協会の発掘現場視察	33
第44図	2004年6月28日の現地説明会	35
第45図	2004年7月4日の現地説明会	35
第46図	先山徹氏による花崗岩の観察指導	40
第47図	芦屋市教育員による発掘現場視察	40
第48図	追い込みの発掘、採拓作業	42
第49図	谷1 平面・断面図（1/200）	46
第50図	A地区第9地点①トレンチ41号石材 平面・断面実測図（1/20）	48
第51図	A地区第9地点 43号石材 平面・立面（A・B）実測図（1/40）	49
第52図	本発掘調査A-1区（第12地点）西壁上層断面実測図（1/60）	50
第53図	A地区第12地点 49・50号石材 平面・立面・断面実測図（1/20）	51
第54図	A地区谷 50号石材 南側サブトレンチ1南壁 上層断面実測図（1/40）	53
第55図	A地区谷 76号石材 南側サブトレンチ2南壁 土層断面実測図（1/40）	53
第56図	A地区谷 81号石材 東西サブトレンチ3南壁 土層断面実測図（1/40）	53
第57図	A地区谷 81号石材 東西サブトレンチ4南壁 土層断面実測図（1/40）	53
第58図	A地区谷 82号石材 東西サブトレンチ5南壁 土層断面実測図（1/40）	53
第59図	A地区谷 53・125・126号石材 東西サブトレンチ 南壁土層断面実測図（1/40）	53
第60図	A-D地区谷1 平面実測図（1/350）	53

第61図	D地区谷底部トレンチ南壁土層断面実測図(1/40) .....	54
第62図	A地区第12地点 51号石材 平面・立面・断面実測図(1/20) .....	56
第63図	A地区 52号石材 平面・立面・断面実測図 54号石材 平面・断面実測図(1/20) .....	57
第64図	A地区第12地点 53号石材 平面・断面実測図(1/20) .....	58
第65図	A地区第12地点 76号石材 平面・立面・断面 77号石材 平面・断面実測図(1/20) .....	59
第66図	A地区谷1 81号石材 平面・立面・断面実測図(1/20) .....	60
第67図	A地区谷1 82号石材 平面・断面実測図(1/20) .....	61
第68図	A地区谷1 83号石材 平面・断面実測図 84・85号石材 平面・断面実測図	
	A地区谷1 86号石材 平面・断面実測図(1/20) .....	62
第69図	A地区 124号石材 平面・立面・断面実測図(1/20) .....	63
第70図	D地区 108号石材 平面・断面実測図(1/20) .....	63
第71図	D地区 109号石材 平面・断面実測図(1/20) .....	63
第72図	D地区 105号石材 平面・断面実測図(1/20) .....	63
第73図	C地区第19地点①トレンチ 平面・断面実測図(1/40) .....	65
第74図	C地区第19地点⑤トレンチ 南壁土層断面実測図(1/40) .....	65
第75図	C地区第19地点①トレンチ サブトレンチ①～④・セクションベルト 南壁土層断面実測図(1/40) .....	66
第76図	C地区第19地点①トレンチ 91号石材(刻印石) 南面・東面・立面実測図(1/20)・拓影 .....	67
第77図	C地区第19地点①トレンチ 92・94号石材 立面実測図(1/20) .....	68
第78図	C - I A・B区 平面実測図(1/200) .....	69
第79図	C地区第16地点②トレンチ平面図 西壁・南壁土層断面実測図(1/40) .....	70
第80図	C地区第16地点③トレンチ平面図 南西壁・北西壁土層断面実測図(1/40) .....	71
第81図	C地区第16地点④トレンチ平面図 南壁・西壁土層断面実測図(1/40) .....	72
第82図	C地区第16地点⑤トレンチ平面図 東壁・北壁土層断面実測図(1/40) .....	73
第83図	C - I B地区石垣6の一部 土層断面実測図(1/40) .....	74
第84図	C - I B区142号石材(刻印石) 平面・断面実測図(1/20)・拓影 .....	78
第85図	C - I B区142号石材(刻印石) 隣接第1・2トレンチ土層断面実測図(1/20) .....	79
第86図	A地区第9地点①トレンチ42号石材 平面・断面実測図(1/20) .....	80
第87図	B地区87号石材 平面・立面・断面実測図(1/20)	
	88号石材 平面・立面・断面実測図(1/20) .....	
	87・88号石材 平面構造実測図(1/40) .....	82
第88図	B地区110・111号石材 平面・立面実測図(1/20) .....	83
第89図	A - II 地区第8地点②トレンチ本掘調査II区西壁土層断面実測図(1/40) .....	85
第90図	A地区第8地点 44号石材平面・断面、45号石材平面・断面、46号石材平面・立面・断面、47号石材 平面・断面実測図(1/20) .....	86
第91図	A地区第11地点①②トレンチ配置図と検出遺構(1/200) .....	87
第92図	A地区第11地点①トレンチ 北壁土層断面実測図(1/40) .....	87
第93図	C - I A区 炊壁残塊土状況平面・立面実測図(1/20) .....	88
第94図	C - II B区 西壁土層断面実測図(1/40) .....	89
第95図	C - II B区 第15地点③トレンチ南側拡大部分の平面図(1/100)、各遺構平面・断面図(1/40) .....	90
第96図	A地区第7地点①トレンチ 東壁土層断面実測図(1/80) .....	92
第97図	A地区第2地点①トレンチ 西南西壁・北壁土層断面実測図(1/40)	
	A地区第2地点①トレンチ 北壁土層断面実測図(1/40) .....	93
第98図	A地区第10地点①トレンチ 南壁・北壁・西壁土層断面実測図(1/40) .....	95
第99図	A地区第10地点②トレンチ サブトレンチ①南壁(西半・東半)・西壁、サブトレンチ②西壁 土層断面実測図(1/40) .....	96
第100図	A地区第10地点③トレンチ 北壁土層断面、⑥トレンチ西壁土層断面実測図(1/40) .....	97
第101図	A地区第10地点④トレンチ 3号石材 平面・立面・断面実測図(1/20) .....	98
第102図	B地区第3地点①トレンチ 北壁土層断面実測図(1/40) .....	99
第103図	A地区第6地点①トレンチ 北壁土層断面実測図(1/40) .....	99
第104図	B地区第4地点①トレンチ 北壁・東壁土層断面実測図(1/80) .....	101
第105図	B地区第21地点①②③トレンチ 平面実測図(1/200) .....	102
第106図	C地区第15地点①トレンチ東壁②トレンチ東壁・南壁土層断面実測図(1/40) .....	104
第107図	C地区第15地点③トレンチ 東壁土層断面実測図(1/40) .....	104
第108図	C地区第17地点①トレンチ 第19地点③トレンチ 西括張部配石溝平面実測図(1/80) .....	105
第109図	C地区第17地点①トレンチ 配石溝平面実測図、切り通しサブトレンチ土層断面実測図(1/40) .....	106
第110図	C地区第19地点③トレンチ西括張部 平面実測図・西壁土層断面実測図(1/40) .....	107
第111図	A地区石垣1(南壁) 土層断面実測図(1/40) .....	109
第112図	B地区石垣4・89号石材 立面実測図、90号石材 平面・立面・断面実測図(1/20) .....	110
第113図	C地区第18地点①トレンチ 南壁・西壁土層断面実測図(1/80) .....	111
第114図	C地区第24地点①トレンチ 平面実測図(1/100)・南壁土層断面柱状実測図(1/40) .....	112
第115図	E地区第23地点①・②トレンチ 西壁土層断面実測図(1/80) .....	114
第116図	出土遺物(原寸・1/3) .....	116

第117図	出土遺物（原寸・1/3）	118
第118図	現行石工の鉄製道具実測図(1) (1/4)	120
第119図	現行石工の鉄製道具実測図(2) (1/4)	122
第120回	調整石生成工程の諸類型模式図	128
第121回	さまざまな石切技術例	129
第122回	石垣構築技術の変遷（金沢城、城内展示）	130
第123回	東六甲採石場切石規模比較集成図 (1/100)	132
第124回	矢穴・矢穴痕 拓影(1) 縦尺約1/8	137
第125回	矢穴・矢穴痕 拓影(2) 縦尺約1/8	138
第126回	矢穴・矢穴痕 拓影(3) 縦尺約1/8	139
第127回	矢穴・矢穴痕 拓影(4) 縦尺約1/8	140
第128回	矢穴・矢穴痕 拓影(5) 縦尺約1/8	141
第129回	矢穴・矢穴痕 拓影(6) 縦尺約1/8	142
第130回	矢穴・矢穴痕 拓影(7) 縦尺約1/8	143
第131回	矢穴・矢穴痕 拓影(8) 縦尺約1/8	144
第132回	矢穴・矢穴痕 拓影(9) 縦尺約1/8	145
第133回	石材別矢穴列・矢穴列痕抽出実測図(1)	147
第134回	石材別矢穴列・矢穴列痕抽出実測図(2)	148
第135回	石材別矢穴列・矢穴列痕抽出実測図(3)	149
第136回	矢穴Aタイプの縦断面形細分諸形式模式図と実例	150
第137回	Bタイプ矢穴痕の類例	158
第138回	藤川祐作氏設定「矢穴古Aタイプ」の模式化（縦断半裁）	159
第139回	藤川祐作氏設定矢穴古Aタイプ拓影集成	160
第140回	検出刻印拓影一覧（縮尺約1/4）	162
第141回	岩ヶ平刻印群 刻印石の分布と各藩採石範囲 (1/6,000)	163
第142回	「雁」刻印の検出石種と担当大名対象図	165
第143回	雁刻印のバリエーションと類似刻印の系統分類	166
第144回	石材搬出ルートの推定図	172
第145回	推定石材搬出ルートの勾配計測表	174
第146回	大坂城と東六甲採石場と近世初期尼崎藩の領村分布	178
第147回	江戸時代の新田開発の面影を残す調査地の古い写真(1) (北西から)	180
第148回	江戸時代の新田開発の面影を残す調査地の古い写真(2) (南西から)	180
第149回	調査地近傍でみつかった矢穴痕のみられる石	180
第150回	宮川河口遺跡出土毛利家刻印石A	181
第151回	宮川河口遺跡出土毛利家刻印石B	181
第152回	宮川河口遺跡出土毛利家刻印石C	181
第153回	刻印石A拡大	181
第154回	刻印石B拡大	181
第155回	刻印石C拡大	181

## 表 目 次

第1表	徳川幕府による大坂城の修築事業とその工程	18
第2表	地質年表	24
第3表	小豆島岩谷丁場にみられる種石の法量	133
第4表	小豆島岩谷丁場にみられる角取石の法量	134
第5表	小豆島岩谷丁場にみられるそげ石の法量	135
第6表	各石材矢穴・矢穴痕法量一覧表(1)	151
第7表	各石材矢穴・矢穴痕法量一覧表(2)	152
第8表	各石材矢穴・矢穴痕法量一覧表(3)	153
第9表	各石材矢穴・矢穴痕法量一覧表(4)	154
第10表	当調査地点矢穴全サイズ分布グラフ	155
第11表	矢穴グラフ (六麓荘・城山既応データ)	156
第12表	岩ヶ平刻印群 烏刻印石集成一覧表	164
第13表	岩ヶ平刻印群における刻印石の種別と刻印数	168
第14表	小豆島岩谷丁場における石材・刻印石の種別と刻印数	168
第15表	小豆島岩谷丁場にみられる刻印石の法量	169
第16表	奥山刻印群刻印石刻印法量分析グラフ	170
第17表	岩ヶ平刻印群刻印石刻印法量分析グラフ	171
第18表	日本史・大坂城と芦屋の出来事略年表	176

# 図 版 目 次

- 図版1 大阪湾上空から芦屋市街地や六甲山地東南麓をのぞむ 芦屋市広報課撮影・提供（平成14年）  
東方上空から岩園町・六麓荘町付近を俯瞰する  
芦屋市広報課撮影・提供（平成5年）
- 図版2 調査地遠景（北東から）  
調査地遠景（南西から）
- 図版3 A地区斜面上方より西宮・大阪市街を望む（梅原章一氏撮影）
- 図版4 谷1右岸上方斜面よりA地区全域を望む（梅原章一氏撮影）
- 図版5 A地区谷1 石切丁場検出状況（梅原章一氏撮影）  
A地区谷1 沢地一帯に広がる元和～寛永期の石切丁場（梅原章一氏撮影）
- 図版6 C地区本調査Ⅲ区 姿を現した元和～寛永期の石切丁場（梅原章一氏撮影）
- 図版7 C地区本調査Ⅲ区石切丁場完掘状況（梅原章一氏撮影）  
C地区本調査Ⅲ区91・92・112号石材・刻印石近景（梅原章一氏撮影）
- 図版8 A・D地区谷1 調査前の状況（西から）  
C地区谷2 远景（南東から）  
B地区遠景（北から）
- 図版9 A地区調査開始直後の遠景（南から）  
A地区谷1左岸部の状況（南東から）  
A地区谷1の石材検出状況（東から）
- 図版10 C地区第15地点発掘調査前の旧状（南から）  
C地区第16地点東半発掘調査前の旧状（北から）  
C地区第16地点西半発掘調査前の旧状（北から）
- 図版11 C地区谷2 左岸尾根突端部からの遠景（西から）  
C地区谷2 調査前の状況（西から）  
B地区段丘縁の遠景（西から）
- 図版12 A・D地区 谷1遠景（谷尻から谷頭を望む）  
A地区谷1 左岸上方から全体を望む（北西から）
- 図版13 A地区谷1 確認発掘開始状況（南から）  
A地区谷1 本発掘前の防災状況（北西から）  
A地区谷1 石切丁場発掘調査状況（北東から）  
A・D地区谷1 の石切丁場（西から）  
A地区谷1 石切丁場発掘調査状況（北から）  
D地区谷1 北東壁断面（南西から）
- 図版14 A地区81号石材〔矢穴石〕検出状態（西北から）  
A地区53号石材〔矢穴石〕検出状態（南から）  
A地区49・50号石材と81号石材（南東から）  
A地区53号石材のヤバトリと矢穴（北から）  
A地区82号石材〔矢穴痕をもつ端材〕（東南東から）  
A地区50号石材〔矢穴断面〕（東から）
- 図版15 A地区42号石材検出状況  
A地区谷1 49・50号石材検出状況（西から）  
A地区谷1 49・50号石材検出状況（南から）  
A地区谷1 52号石材検出状況（西から）  
A地区谷1 124号石材検出状況（東から）
- 図版16 D地区確認調査トレンチ発掘操作風景（西から）  
D地区確認調査トレンチ発掘状況（西から）  
D地区確認調査トレンチ土層断面（北から）  
A地区谷底108号石材付近検出状態（東から）  
A地区108号石材（Aタイプ矢穴孔痕）（東から）  
A地区86号石材（Aタイプ・Cタイプの矢穴痕）
- (南から)
- D地区谷1 ベース層内（大阪層群起源）出土木質遺物（北から）  
D地区谷1 ベース層内（大阪層群）縦断トレンチ（南から）
- 図版17 A地区54・55号石材検出状況（北東から）  
C地区117号石材検出状況（東から）  
A地区46号石材検出状況（南から）  
A地区45号石材検出状況（南から）  
A地区47号石材検出状況（南から）  
C地区130号石材検出状況（南西から）
- 図版18 A地区第12地点83号石材検出状況（東から）  
A地区谷1 左岸断面（東から）  
A・D地区 谷1 右岸断面（東から）  
A地区 本発掘調査第Ⅱ区トレンチ設定状況（南から）  
A地区 本発掘調査第Ⅱ区西壁断面（南東から）  
A地区 第10地点①トレンチ近景（北から）
- 図版19 C地区第19地点①トレンチ発掘開始・表土剥ぎ（北東から）  
C地区第19地点①トレンチの表土除去状況（東から）  
C地区第19地点①トレンチの作業面検出状態（東から）  
C地区第19地点①トレンチの作業面検出状態（南から）  
C地区第19地点①トレンチの作業面検出作業風景（南から）  
C地区第19地点①トレンチの91号石材直下作業面、コッパ集中部検出状態（北東から）
- 図版20 C地区第19地点①トレンチ遺物出土状況  
C地区第19地点①トレンチ（東から） 遺物出土状況  
C地区第19地点①トレンチ北端（南から） 遺物出土状況  
C地区第19地点①トレンチ遺物出土状況  
C地区第19地点①トレンチ遺物出土状況  
C地区第19地点①トレンチ遺物出土状況  
C地区第19地点①トレンチ取り上げコッパ・出土遺物  
C地区第19地点①トレンチ取り上げコッパ・出土遺物
- 図版21 C地区Ⅲ区北半部コッパ面検出状態（南東から）  
サブトレンチ①上層断面 石材接地土壤層と上層コッパ面（東から）  
C地区91・92号石材検出状況〔割石第2工程〕（南西から）  
C地区サブトレンチ①上層断面 石材接地土壤層と上層コッパ面（南東から）  
C地区92・93号石材間の江戸時代初期作業面検出状態（南西から）  
C地区サブトレンチ④上層断面 割石第1段階下層コッパ面（東から）  
C地区第19地点①トレンチ91号石材のCタイプ矢穴剖面（東から）  
C地区第19地点①トレンチ92号石材の剖面（上面）
- 図版22 B地区遠景（第16・21地点付近・南から）  
B地区第21地点①トレンチ調査前の状況（東から）

- B地区第21地点遠景（南西から）  
B地区第21地点②トレンチ巨礫検出状況（北から）  
B地区第16地点盛土確認調査（南から）
- 図版23 B地区第21地点②トレンチ設定状況（南東から）  
B地区調査状況遠景（北から）  
B地区第21地点②③トレンチ確認調査作業風景（南東から）  
B地区第21地点②③トレンチ確認調査完掘状況（北西から）  
B地区検出加工石（123号石材）  
123号石材Aタイプの矢穴痕  
B地区石垣4確認トレンチ（北西から）  
B地区石垣4確認トレンチ出土の花崗岩（北から）
- 図版24 A地区石垣1と平坦面の巨礫遺存状況（東から）  
石垣に転用されたAタイプの矢穴痕を持つ削石（東から）  
C地区第19地点②トレンチ石垣検出状況（東から）  
C地区第19地点②トレンチ石垣の裏込め土確認トレンチ（北から）  
B地区石垣4断面裏込め確認状況（北から）  
B地区石垣4の基礎石に転用された89号石材（東から）  
B地区石垣4断面裏込め確認状況（北から）  
B地区石垣4裏込め土の版築状況（北から）
- 図版25 A地区石垣1 南半部の石材転用状況（北東から）  
A地区石垣1中央付近裏込め確認部分（東から）  
A地区石垣1の構築状況と用石（南から）  
石垣1の12号石材に認められる矢穴痕（南東から）  
A地区石垣1の13号石材に認められる矢穴痕（南東から）  
A地区石垣1の14号石材に認められる矢穴痕（南東から）  
A地区石垣1の15号石材に認められる矢穴痕（南東から）  
A地区石垣1の16号石材に認められる矢穴痕（南東から）
- 図版26 A地区石垣1検出状況（南東から）  
A地区石垣2検出状況（南東から）  
A地区石垣1 58号石材検出状況（南東から）  
A地区石垣1 59・60号石材検出状況（南東から）  
B地区石垣4付近検出90号石材（東から）  
A地区谷1 検出85号石材  
C地区谷2左岸検出石垣（東から）  
C地区谷2右岸検出石垣（北西から）
- 図版27 E地区110・111号石材発見時の状況（東から）  
E地区110・111号石材発見時の状況（遠景・東から）  
E地区110・111号石材下草・表土除去後の状況（東から）  
E地区110・111号石材下草・表土除去後の状況（西から）  
B地区87号石材検出状況（東から）  
B地区87号石材と88号石材検出状況（南西から）
- 図版28 C地区調査前の田畠跡風景（北西から）  
C地区谷2左岸より西宮市街を望む（北から）  
C地区第16地点①トレンチ（北から）  
C地区第16地点②トレンチ（北西から）
- C地区第16地点③トレンチ（北西から）  
C地区第16地点⑥トレンチ（北東から）  
C地区第17地点①トレンチ試掘状況（北から）  
C地区第17地点①トレンチ試掘状況（南から）  
C地区第17地点①トレンチ刻印石、矢穴痕をもつ石材出土状況（東から）
- 図版29 A地区第10地点④トレンチ3号石材（東から）  
A地区第10地点④トレンチ3号石材（北西から）  
A地区谷1から第9地点をのぞむ（北から）  
A地区第9地点①トレンチ 42号石材（北から）  
A地区第9地点①トレンチ 42号石材（東から）  
A地区第9地点①トレンチ 41号石材（北東から）  
A地区谷1 108号石材（西から）  
B地区 90号石材（東から）
- 図版30 A地区第10地点④トレンチ 3号石材（北東から）  
A地区第10地点②トレンチ 遠景（北から）  
C地区第18地点①トレンチ設置状況（北から）  
C地区第18地点①トレンチ（北から）  
B地区斜面域確認トレンチ87号石材採掘土坑  
A・B地区境界付近の確認トレンチ（北から）  
C地区第16地点③トレンチ 101号石材（北東から）  
C地区第20地点⑤トレンチ完掘状況（北東から）  
C地区配石溝段差部検出状況（東から）  
C地区配石溝および平坦面検出状況（西から）  
C地区配石溝テストトレンチ②断面確認状況（東から）  
C地区配石溝テストトレンチ①断面確認状況（西から）  
C地区配石溝テストトレンチ②確認状況（北から）  
C地区配石溝の断面（西から）
- 図版32 C-II B区 土坑・焼土坑群検出状態（北から）  
C-II B区 土坑・焼土坑群検出状態（東から）  
C-II B区 土坑・焼土坑群発掘状態（東から）  
C-II B区 焼土・炭化物検出状態（東から）  
C-II B区 焼土・炭化物検出状態（東から）  
C-II B区 西壁上層断面（北東から）
- 図版33 C-I A区 本発掘調査区での鉄筋が状造構の検出状況（西から）  
C-I A区 出土炉状造構平面（上から）  
C-I A区 出土炉状造構断面（西から）
- 図版34 A地区第11地点①トレンチ採石土坑検出状況（南西から）  
A地区第11地点①トレンチ採石土坑掘削状況（南西から）  
A地区第11地点①トレンチ採石土坑掘削状況（南東から）  
A地区第11地点①トレンチ採石土坑上層断面（南西から）  
A地区谷1 76・77号石材検出状況と周辺のコッバ群  
A地区第8地点②トレンチ44号石材検出状況
- 図版35 A地区第1地点①トレンチ古墳状隆起確認調査（北西から）  
A地区第1地点①トレンチ古墳状隆起確認調査（北東から）  
A地区第11地点①トレンチ採石土坑掘削状況（南西から）  
A地区第11地点①トレンチ採石土坑上層断面（南西から）  
A地区谷1 76・77号石材検出状況と周辺のコッバ群  
A地区第8地点②トレンチ44号石材検出状況
- 図版36 A地区第1地点①トレンチ古墳状隆起確認調査（北西から）  
A地区第1地点①トレンチ古墳状隆起確認調査（北東から）  
A地区第6地点①トレンチ古墳状隆起確認調査（南から）  
A地区第2地点①トレンチ古墳状隆起確認調査（西から）

	A地区第6地点①トレント古墳状隆起確認調査 (東から)	43号石材 接写
	B地区第3地点①トレント古墳状隆起確認調査 (北から)	79号石材 接写
図版37	C地区第16地点①トレント・⑤トレント(北から) C地区第16地点⑥トレント(南から) C地区第16地点⑦トレント(東から) C地区第19地点②トレント(西から) C地区第15地点③トレント(西から) C地区第19地点④トレント(東から) C-I A区(第16地点①・⑤トレント)全景(北東から) C地区第19地点④トレント(南東から)	76号石材 接写
	C地区I B区調査区遠景(東から)	58号石材 接写
図版38	C地区142号石材原位置確認サブトレント(東から) C地区I B区調査風景(南から) C地区142号石材基底小トレンチ実測風景 C地区142号石材全形確認状況(北から) C地区17地点①トレント116号石材刻印面 146号石材刻印面とCタイプの矢穴旗 147号石材刻印面	21号石材 接写
	C地区本調査C-I B区142号石材〔刻印石〕検出状態(東から)	82号石材 接写
	C地区本調査C-I B区142号石材〔刻印石〕検出状態(北から)	84号石材 接写
図版40	C地区本調査C-I B区142号石材〔刻印石〕(西から) C地区本調査C-I B区142号石材〔刻印石〕(南から)	53号石材 接写
図版41	C地区本調査C-I B区 割石群〔129~131号石材〕(南東から) C地区本調査C-I B区 割石群〔104・128・134号石材付近〕(南西から)	図版45 矢穴・矢穴痕のみられる六甲花崗岩石材の表面接写(2) 83号石材 接写
図版42	C地区本調査C-I B区 西半城全景(南西から) C地区本調査C-I B区 全景(南東から) C地区本調査C-I B区 全景(北東から) C地区本調査C-I B区 南半城近景(東から) C地区本調査C-I B区 142号石材〔刻印石〕(東から) C地区本調査C-I B区 142号石材〔刻印石〕東西面拡大 C地区本調査C-I B区 142号石材〔刻印石〕(北東から) C地区本調査C-I B区 142号石材〔刻印石〕(南から)	81号石材 接写 81号石材 接写 51号石材 接写 82号石材 接写 108号石材 接写 76号石材 接写 78号石材 接写 77号石材 接写 86号石材 接写
図版43	C地区I B区 石材の出土状況(上)と個別岩質表層写真(下) 127号石材 接写 128号石材 接写 129号石材 接写 130号石材 接写 132号石材 接写 133号石材 接写 134号石材 接写	図版46 A地区谷176号石材(右)・77号石材(左)出土状態(東から) A地区谷176号石材・77号石材接触部 Aタイプの矢穴痕 A地区谷1 第81号石材 A地区谷1 第53号石材 Aタイプの矢穴拡大 A地区第81号石材 矢穴剥(拡大) A地区第81号石材 龜裂部分(拡大) A地区第81号石材 矢穴・亀裂箇所(拡大) A地区第81号石材 西端のズレと上層 図版47 矢入れ実験試行(左から木製・鉄製・鉄製) 矢穴断面(A地区50号石材Aタイプの元和・寛永期) 矢穴断面(A地区51号石材Aタイプの元和・寛永期) 矢穴断面(A地区85号石材Aタイプ元和・寛永期) 矢穴痕の様相(A地区23号石材Aタイプ元和・寛永期) 矢穴痕の様相(A地区50号石材Aタイプ元和・寛永期) 矢穴痕の様相(C地区114号石材Aタイプ元和・寛永期) 矢穴痕の様相(第17地点①トレント116号石材) 木製杖による石削作業実験風景 石削作業実験によって生じた新鮮なコッパと母岩表面剥離で失敗した母岩の矢穴部分(断面) 端正な丸逆台形のAタイプ矢穴断面(II-a型式) 現代風の矢穴削り 手ごろな花崗岩自然石の矢入れ状況 石割り杖の矢穴Dタイプ断面 切断後の断面と開けられた削岩機による矢穴断面 小鍛冶によるノミ(鑿)・ヤ(矢)の修理実験 現代の石工の道具類 溶解炉をレンガや壁上で構築する 炉底で火を起こし、原料鉄を溶かす 精錬鍛冶炉の使用実験 原料鉄は砂鉄をもち込む 溶解炉とり壊し後の炉床と炭化物 中村石材株式会社・倭城研究グループの協力によ
図版44	矢穴・矢穴旗のみられる六甲花崗岩石材の表面接写(1) 51号石材 接写 76号石材 接写 41号石材 接写 82号石材 接写	図版49

- る鉄矢作成実験風景
- 図版50 出土遺物（1・2・4～6・8・9・11～13外  
面）  
出土遺物（1・2・4～6・8・9・11～13内  
面）
- 図版51 出土遺物（14～21外面）  
出土遺物（14～21内面）
- 図版52 出土遺物（22～25・C-I区A～B間・C地区  
15-3tr盛土内 外面）  
出土遺物（22～25・C-I区A～B間・C地区  
15-3tr盛土内 内面）
- 図版53 出土遺物（10・27・26・7・鉄製品）・鉄製矢の  
実例
- 図版54 開田康博文化庁文化財部記念物調査官現地指導  
風景 A地区谷丁場跡の視察と調査方法協議  
兵庫県文化財保護審議会史跡・埋蔵文化財部会委  
員（石野博信氏、寺澤知子氏、和田晴吾氏）現地  
視察  
芦屋市文化財保護審議会委員（村川行弘氏・多潤  
敏樹氏・神木哲男氏）現地視察  
日本考古学協会埋蔵文化財対策委員会現地視察  
(鈴木重治氏・百瀬正恒氏・中村博司氏) プレス  
発表  
研究者・研究団体による現地見学検討会（渡辺武  
氏・元大阪城天守閣館長による大阪城の説明）  
研究者・研究団体による検討会（村川行弘芦屋市  
文化財保護審議会委員による奥山刻印群発見時の  
説明）
- 兵庫県教育委員会文化財行政室（平田博幸主査）  
来路、調査方法・調査進行工程協議  
調査終了立会風景（ウエスト・ハウス株式会社中  
井課長・高島社会教育部長・西川文化財課長）  
91～93号石材付近
- 図版55 現地説明会風景（平成16年7月4日） A地区谷  
丁場跡付近 市民延280名参加  
フランス考古学者ロラン・ネスブルス氏（ソルボ  
ンヌ大学、大阪大学留学生）来援  
研究者・研究団体への説明風景（B地区 87号石  
材付近）  
城郭研究者・研究団体との現地見学検討風景（平  
成16年6月30日）  
研究者・研究団体への現地見学検討会・説明風景  
(A地区谷1左岸より)  
奥田尚氏による六甲花崗岩石材専門調査風景（3  
号石材付近）  
千葉県東邦高等学校考古学部来路風景  
千葉県東邦高等学校考古学部並びに顧問山岸良二  
氏（中央）と奥田尚氏（左端）
- 図版56 本格的な造成工事に入った発掘調査現場（2005年  
5月）  
事業者の協力と努力によりひき上げられた主要保  
存石材  
工事現場に仮置きされた93号石材（近景）

# I 調査に至るいきさつ

## (1) 発掘調査前の協議経過と工事着手の経緯

激動の戦国乱世を経て、織豊政権の安土桃山時代が過ぎ、慶長 20 年（1615）5 月の大坂夏の陣の終戻を契機に、人々の争いの時代は一応の終止符を打つこととなった。近世、徳川統一政権下の大坂は、都市支配の基盤整備が着実に進められ、その中心に再建大坂城は置かれ、焦土と化した市街や荒廃しきった近郊農村の復興が目指されたのである。17 世紀前半のいわゆる元和～寛永期とは、都市大坂が希望に満ちて再生の歩みをたどった時代であり、大坂城再興の槌の音が鳴り響いた。それはまた、わが町芦屋と大阪が歴史の上で最も結び付きを強めたドラマの時代でもあった。その証左の一端は、遺跡の形で市内の各所に残っており、現存する徳川大坂城の花崗岩製高石垣のおよそ半数近くの石材が六甲山地東部一帯の丘陵や台地から切り出され、その物証たる遺構を今に伝えている。全国的にみてもきわめて珍しい石切丁場や石曳きルートが展開をみせた遺跡であり、本市では、昭和 40 年代前半から始まった芦の芽ケループなど民間の調査活動を受けて、昭和 55 年（1980）以降、埋蔵文化財の保護対象として可能な限り、調査とその取り扱いに意を注いできた【森岡・藤川 1980、森岡 2003・2005b】。

今般、兵庫県芦屋市岩園町 5 番地他 24 筆（面積 27,833 m<sup>2</sup>）において、当遺跡では過去最大規模の開発事業計画が起り、最終的には 6 ヶ月の期間に及ぶ確認調査並びに本発掘調査を行ったが、調査に至るまでの事前協議はもちろんのこと、調査期間中を含め多くの問題を抱えての発掘調査事業となつた。調査を終えてまだ 1 年にならないが、今それらを振り返りつつ、調査開始に至るまでの経緯・経過を記すことから、本書の幕を開きたい。

平成 15 年 7 月 25 日、同日付で、地権者（朝比奈正博氏）より文化財保護法第 57 条 2 第 1 項に基づく埋蔵文化財発掘届出書の提出があった。同年 7 月末の現場視察で、事業地面積が当初 26,898.925 m<sup>2</sup> と広いため、確認調査に先だって現地の主だった状況を知る予察が必要と判断された。平成 15 年 8 月頃には、届出入変更の可能性があるとの連絡を受けたので、届出書の差し替えが必要な旨を指導した。そして、平成 15 年 8 月 25 日、芦屋市教育委員会は予察踏査を実施。短時間歩いただけで、古墳状隆起 6 基、矢穴石を有する石材 2 箇所を確認するとともに、既知の刻印石 1 石を追認した。また、濃密な石材散布地が 4 箇所程度認められることが察知した。この段階で、当該地の地権者に対し、結果及び敷地全域において確認調査が必要な旨を報告するとともに、平成 15 年 10 月 20 日付、開発行為許可申請書等経由審査調査で「文化財保護の取り扱いについて」を届出者宛通知した。

平成 15 年 11 月中旬、届出入変更及び計画変更の可能性が生じてきたので、再度、届出書が必要であり、確認調査の日程等の協議が必要となる旨を連絡する。その結果、平成 15 年 12 月 10 日、変更後の届出入側チバナ代表取締役有江優子氏から差し替えの届出書提出があった。そして、同年 12 月 18 日、当該地について地権者間の売買契約にしたがい、（㈱チバナからウエスト・ハウス㈱に事業者の変更が成立した。翌 12 月 19 日、（㈱チバナの有江氏、山崎総合設計・政治団体国土行政考査会の芝田氏らが新たに加わって文化財調査協議を行い、確認調査への協力事項、日程等具体的な調査内容について早急に協議を進めることを確認した。また、同年 12 月 24 日、山崎総合設計の担当者放氏と確認調査について、具体的な内容を示しつつ協議した。

年が明けて、平成 16 年 1 月 15 日、山崎総合設計担当者の放氏に発掘調査に関する見積書を提示する。地権者との検討を行う旨回答があり、確認調査は自治体が調査主体で実施することを再確認した。同年 2 月 13 日、文化財課長西川とウエスト・ハウス㈱の中井氏とが協議し、売買契約が進み、地権者変更になることを察知する。平成 16 年 2 月 23 日、山崎総合設計担当者の放氏に費用についての回答を打診するも、土地所有者が（㈱チバナからウエスト・ハウス㈱に変更になり、調査費の件でもめている旨、報告があったが、工事計画に全く変更はなく、樹木の伐採は始めているので、早急な確認調査の依頼があった。文化財課では盛土工事は大幅な現状変更に属するので、確認調査前にはできないことを打診し、調査日程の協議を至急行ない旨、連絡する。

平成 16 年 2 月 25 日、改めて山崎総合設計・政治団体国土行政考査会の芝田氏と文化財調査の協議を行う。調査期間、調査内容、調査担当者、調査費などが協議事項である。しかし、翌 2 月 26 日、協議中にもかかわらず、竹村学芸員が当該事業地で造成工事が既に実施されていることを発見し、同日に再度、主査森岡・同学芸員・嘱託坂田で現場を確認（第 1 図）。直ちに現場関係者に工事中止の指示を出し（第 4 図）、写真記録により現場の

損壊状況などを把握する（第2・3図）。その後、山崎総合設計、㈱タチバナ、エスト・ハウス㈱各担当者に緊急連絡を行うとともに、エスト・ハウス㈱に対し、変更後の届出人として文化財保護法に基づく発掘届出書提出を至急指示する。2月27日には、文化財課長西川、文化財課総務担当田中が現地の状況を初めて確認して、工事担当者 遠藤建設 ㈱前田氏から現況を確認し、記録した。

以上、埋蔵文化財の確認調査に先行した本造成工事は、エスト・ハウス㈱が遠藤建設㈱に発注し、平成16年1月16日頃に契約、1月頃から工事を開始し、Ⅲ耕作地部分と一部防災上必要な部分の盛土を実施しているものであり、その間に遺跡の内容判断を行い、㈱タチバナから造成工事に支障なき旨を確認しているとのことであった。そして、盛土の高さは、最大8m、平均1.5～2mあるといい、既に進行した工事により、一部箇所（東部傾斜地）で、第2次災害の可能性が予想されるため、開発担当課へ連絡の上、現状を維持する方法として、ブルーシートをかけ、水をシート上に流す方法を採用して、土砂崩れなどの事故回避の応急措置とし、2月28日段階にはその実施を確認した（第2図）。同夕方、兵庫県教育委員会文化財室の岡崎正雄課長補佐（審査指導係長）に対し、口頭で上述の経緯の一部を説明するとともに、近く現地指導に入ってほしい旨、切望する。また、翌日、文化財課長西川が再度現地を確認し、3月1日には、文化財課内で今後の対応策を協議した。その結果、現在の工事主体者からの早急な届出書提出、及び経過書・顕木書・現状図面の添付を指示するとともに、書類の提出を待って、3月22日から確認調査開始を検討することとし、夕刻、兵庫県教育委員会に行政指導依頼書を発送した。

平成16年3月2日、兵庫県教育委員会文化財行政室の岡崎正雄課長補佐が芦屋市に入り、文化財課でこれまでの事情説明と今後の対応策について検討するとともに、関係者で現地を踏査した。岡崎氏からは早急に損壊確認を目的とした1日程度の調査に入るよう指導を受けるとともに、原因者に始末書を求めること、文化財保護法第57条2第1項に基づく発掘届出書の提出を至急に要請する旨指示される。以上の経過を受け、平成16年3月4日、森岡・竹村を調査担当者として事業地全体の損壊確認調査を実施した（第5図）。

その後、現地の動きを把握して、平成16年3月5日、神戸新聞（阪神版）に本件に関する記事が出るとともに、阪神地区文化財担当者会（於：伊丹市）の



第1図 着手工事発見日の現場状況（北から）



第2図 着手工事発見日の状況（谷1斜面付近）



第3図 工事発見日の掘削坑（C地区付近）



第4図 工事の中断協議の状況

席上、経緯などを参加各自治体に報告する自体となつた。統いて、翌3月6日、朝日新聞（阪神版）に報道記事が掲載された。遺跡の取り扱いに関するトラブルを市民や研究者も熟知する状況となった。

平成16年3月15日、事業主舗と工事緊急停止後初の事後協議の場を設け、旧事業主の㈱タチバナ、新事業主のウエスト・ハウス㈱西畠社長・中井課長、アドバイザーの政治団体国土行政考查会の芝田氏、仲介業者㈱タクヤの関係者がほぼすべて揃って来芦されたので、事業者の変更経過と今回の工事着手に至った経緯に基づく始末書の提出の問題などを打ち合わせるとともに、再度埋蔵文化財保護手続きのフローチャートを説明し、同時に、2月26日までの損壊状況を調べた調査の概要を説明した。開発者側の説明に基づけば、㈱タチバナからウエスト・ハウス㈱に事業主変更が行われる際、付帯条件として文化財調査の完了があること、ウエスト・ハウス㈱は宅地造成を専門とする業者ではないので、発掘調査が完了してさらに宅地造成計画が終わるまでは、㈱タチバナが事業協力することなどの約束が成立しているが、互いに委任状まではかわしていないことも確認した。現状変更が文化財の破壊行為につながることを明言していたのにもかかわらず、29条の開発協議を通過しているので、伐採工事と重機の搬入、作業場の設営をした程度で、盛土工事の認識は全くない旨、説明を受けるとともに、調査協議では、経費・期間ともに本市教育委員会提出の計画は、全く合意が得られないまま再協議となつた。

（森岡秀人）

## (2) 事業地の工事損壊とその確認調査

調査前に造成工事が開始されるといった不測の事態が発生したため、上記したように、平成16年3月4日、兵庫県教育委員会の指導に基づき、当面の事業地（面積19,435m<sup>2</sup>）を対象とした遺跡損壊確認調査を実施した（第5～8図）。

確認調査・本発掘調査の実施に先立って樹木の伐採、造成工事などが着手され、周知の埋蔵文化財包蔵地の現状が著しく変更されたため、遺跡の損壊度を判断するための調査を1日に限り実施し、向後の行政指導の基礎資料とすることを目的とした。調査主体は、芦屋市教育委員会社会教育部文化財課で、森岡秀人（学芸員）と課員竹村忠洋（学芸員）が担当し、文化財課嘱託坂田典彦・白谷朋世両名および調査・整理補助員が参加した。さらに3月1日までは、工事関係者に対し、



第5図 遺跡損壊確認調査風景（谷2付近）



第6図 削平・切土部分の調査風景（C地区）



第7図 新発見の矢穴石確認状況（42号石材）



第8図 露呈石材略測風景（A地区）

事情聴取や工事中断の申し入れを断続的に行い、この調査により、指導を無視して入った当該地の工事がどのように遺跡に影響をもたらしたかを明らかにすることを主たる目的にすえた。具体的には、①大きな面積を占めた盛土部分の範囲（面積）と盛土の高さを正確に把握する。②切土部分に露出した地層の断面を数地点で精査し、遺跡の損壊度をつかむ。③採石関係石材の分布や古墳想定箇所の分布状況を把握し、遺構の損傷度などを調べる。こうして実施された損壊確認調査に基づき、現状変更の内容について整理してみると、(A) 盛土造成、(B) 切土造成（重機走行によるものを含む）、(C) 樹木伐採、(D) 伐採林仮置、(E) 重機重圧走行、(F) 重機侵入跡、(G) 排水管設置、(H) 掘削坑（乱掘坑）、(I) 工事事務所の設置などに大別され、それぞれの損壊状況を不十分ながら記録にとどめ、報告書として記載した。

いまその段階での検証記録を箇条書きにまとめて、次のようになろう。

- (1) 事業地は、造成工事・伐採作業などが大幅に進行しており、著しく現状の変更が加わっている。当該地が山林と田畠の自然景観と埋蔵文化財包蔵地としての旧地形をよくとどめていたことを考えると、確認調査と、その後に控える本発掘調査にかなり支障を与える改変が確認されたことになる。
- (2) 造成は主として盛土であるが、各所に切土が確認され、深い所では高さ2mの断面が新しく露頭している箇所も存在し、切上された後に盛土されたことが予想できる部分も確認された。造成面積は約5,000m<sup>2</sup>を測り、重機搬入による重圧沈下部分や切土部分をこれに加えると、6,300m<sup>2</sup>に達する。この数値は当初確認調査を予定していた対象面積の35%前後を占める。盛土の行為は基準に基づき発掘調査ともなるし、盛土工事自体は工事立会の対象となる現状変更といえる。
- (3) 造成盛土の下部において確認された田畠の耕作土のさらに下には、遺物包含層や旧地表面が遺存している箇所が多く、重機掘削部分で認められた切土部分で予想された地山も旧地表面より上に耕盤として盛られた二次的堆積の洪積層起源上であった。のことより、大幅に盛土された部分の下に生きているはずの耕作地にも埋蔵文化財の包蔵が予想され、確認調査の対象地として考えるべきであろう。これまでの文献記録や採集記録に散見される「岩ヶ平遺跡」（遺物散布地）は、縄文時代や弥生時代の遺跡に該当し、その存在も十分推定された。
- (4) 造成土全体には、旧地形の起伏が残っている事実が判明したので、これまで存在した近世・近代耕作地が切土主体に形成されたものではなく、盛土を中心には耕盤を確保しつつ、段々面を生み出してきた生産域であったことが推測される。それぞれの耕作面で基本土層や遺物の包含度が十分得られるものと考えられる。
- (5) 不十分な予察で視認された数箇所の古墳状跡起以外に、横穴式石室などを内蔵する古墳の遺存が推定される場所もあり、後期古墳の存在を予測するとともに、八十塚古墳群南限範囲に入る一群が存在する可能性がさらに強まった。これは北部のみの結果であり、もし中・南部の確認ができるば、その数はさらに増加するだろう。
- (6) 古墳と推定されている地點は、谷状を呈する地形の部分にもあり、隆起を呈さないことも十分考えられる。これまで、八十塚古墳群では、凹地地形でも横穴式石室が確認されたケースが目立っており、隆起のみを対象に地表面観察からだけで古墳の存在箇所を絞り込むことは危険であり、不可能とみられる。
- (7) 慶川大坂城東六甲採石場については、東半城を中心に採石痕跡が多数確認された。採石土坑をはじめ、遺構の存在と刻印石なども顕著に分布しており、このたびの造成着手により、これらの想定地もかなり盛土下になっていることが判明した。採石遺構や分布の連続部分が埋没していることは確定である。

以上、当該地では阪神間ではよく知られた3時期以上の複合遺跡が存在する埋蔵文化財包蔵地が著しく損なわれたことが明らかとなった。近世以降の新田開発や近代の石積みを除けば、自然景観をよくとどめた地勢の中に遺跡が眠ってきたところとして市内では特筆される。基本事項たる確認調査実施以前に文化財保護法に基づく発掘届出書もなく工事に着手し、遺跡の現状を損壊した行為はまことに遺憾であり、市教育委員会としては、今後、確認調査の実施や本発掘調査の実施など、適切な文化財の保護措置を講じていく方針を探った。

第1章の冒頭から、変則的な調査開始を迎えた当該調査地のいきさつを記してきた。結局のところ、現開発申請者のウエスト・ハウス㈱も旧地権者から経緯・経過を工作されて土地を購入、開発計画を進めた形となり、事業として受難な方向をたどったと言える。そうした中、ウエスト・ハウス㈱は事業者として遺跡の保護と記録保存によく理解を示され、多大な協力を行ったことをここに銘記しておきたい。

（森岡）

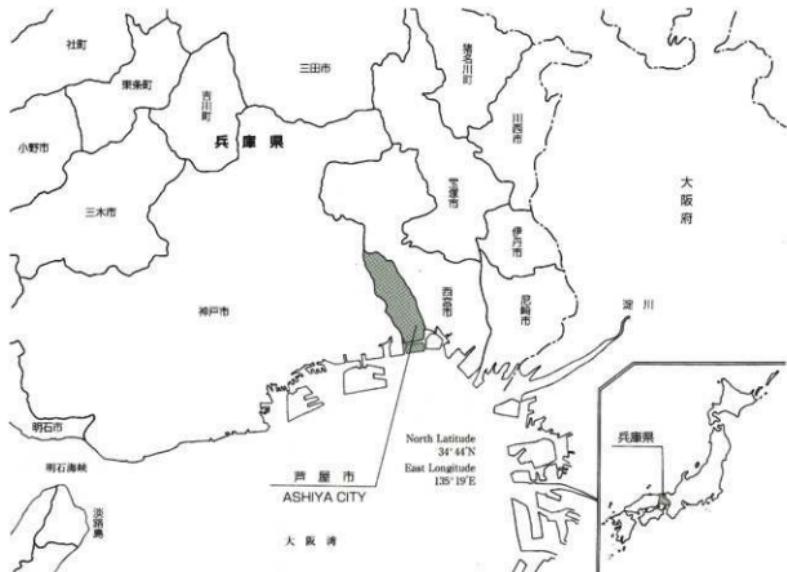
## II 遺跡をとりまく環境

### (1) 地理・地質的環境の中での調査地

芦屋市は兵庫県の南東部、阪神地域のはば中央に位置し、東西約2.5km、南北約8.3km、面積18.57km<sup>2</sup>、人口92,624人（平成17年6月現在）の小さな市である（第9図）。瀬戸内海東端の大阪湾に面するため、温暖少雨で晴天の多い気候を特徴とする。また、六甲前山を背負い、海に向かう緩急を織りませた変化のある斜面は、自然に恵まれ景観も良く、住環境の整った市街地を私たちに提供し、東は商都大阪、西へは港都神戸と、二大都市に近接する日本でも屈指の高級かつ洗練された文化住宅都市として衆知された存在である。

調査地は、その芦屋市の東端部、岩園町5番地他24筆に所在し、東側の隣地境界が西宮市老松町との市境である。六甲山地（最高峰は標高931.3m）の南東麓丘陵に立地する当該地は、標高40～90mを測る急傾斜地で、六麓荘・岩ヶ平台地上の端部に位置する。調査地からは、大阪の河内・和泉方面や和歌山、遠く淡路島を一望できる風光明媚な景観に恵まれており、大阪市域や阪神間の都市化が進行するまでは、採石活動の終着点ともいえる大阪城天守閣の雄姿を望むことが可能であった（第12図、図版3）。

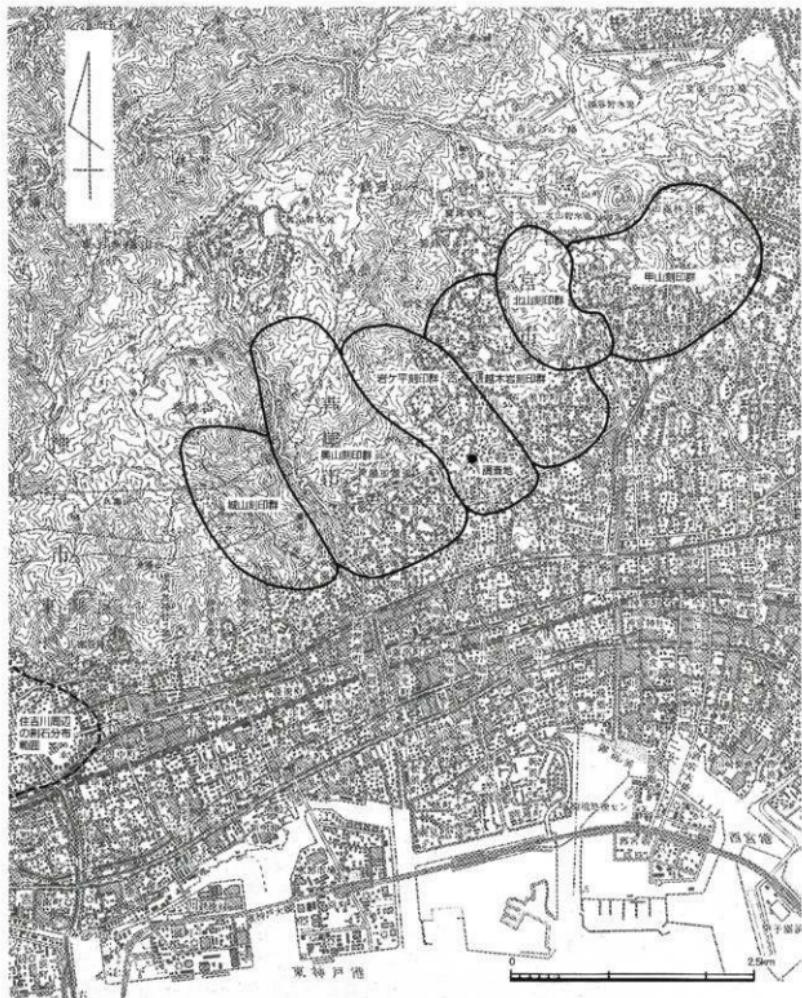
開発事業地は、「八十塚古墳群」と「徳川大阪城東六甲採石場」の重複する周知の埋蔵文化財包蔵地範囲に属し、八十塚古墳群では大別5支群（朝日ヶ丘町・岩園町・六麓荘町・鶴谷・西宮市老松町・苦楽園五番町所在）のうち、岩ヶ平支群のC小支群に相当する。徳川大阪城東六甲採石場は、六甲前山の南東麓、現在の神戸市東灘区から芦屋市・西宮市にかけて東西6km以上の範囲におよぶ石垣普請における屈指の採石場であり、確認された割石の分布密度や刻印種別、地形環境をもとに、現在「城山刻印群」「奥山刻印群」「岩ヶ平刻印群」「越木岩刻印群」「北山刻印群」「甲山刻印群」の6群が設定されている〔藤川1979、森岡・藤川1980〕。その中で今回の調査地は岩ヶ平刻印群に属し、行政調査件数のもっとも多い刻印群に含まれる（第10図）。なお、市内呉川遺跡や宮川河床では、山麓部の採石場とは別に、切り出した石垣用材を海上輸送するための積出し場（浜出し地）と推



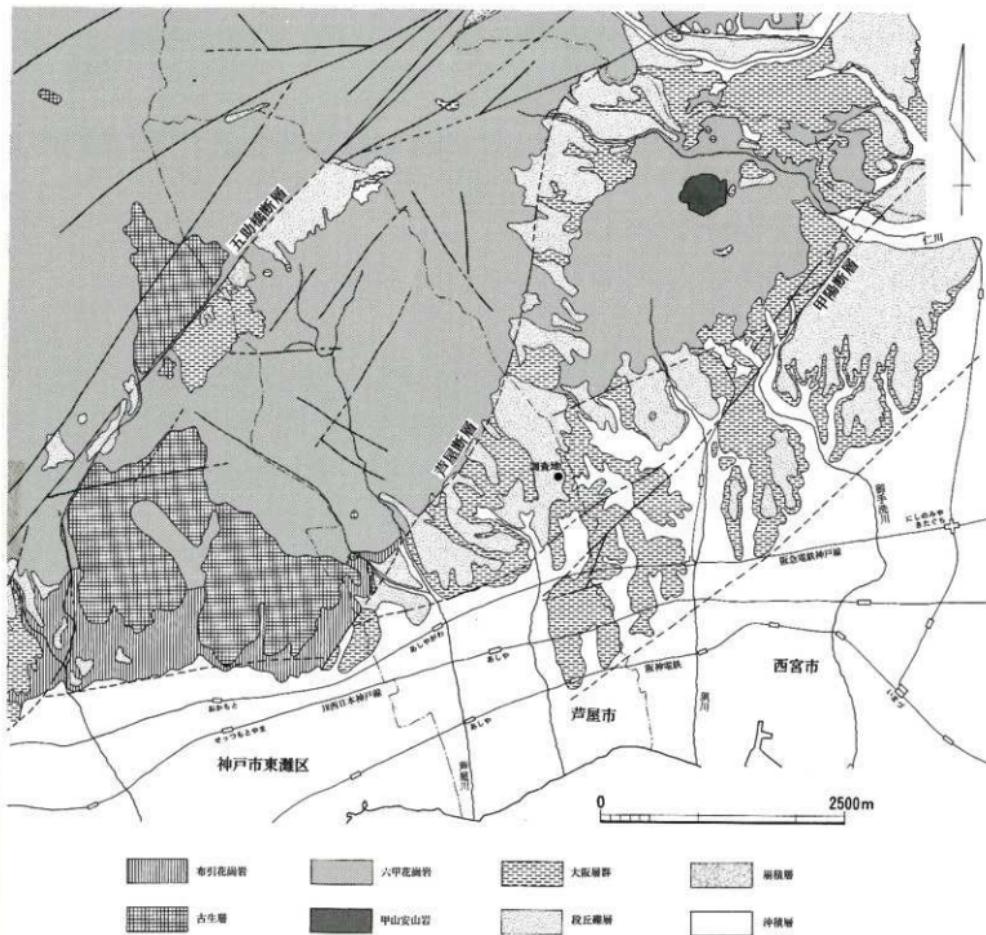
第9図 兵庫県と芦屋市の位置

測される場所で、複数個の調整石材が確認されている（第22～25図、第15図）。このことから、東六甲の当採石場では、六甲前山と海岸線までの距離がきわめて短いという地の利を活かし、さらに複雑に開析された谷筋を流下する小河川が平地部に入り、芦屋川や宮川、夙川に概ね収束する地理的環境を最大限に利用した採石・運搬システムが分業的に展開をみたことが理解されよう。

六甲前山南東麓部における採石場分布のいま一つの特徴は、六甲山地の形成過程や地質的環境が大きく関わっている点である（第11図）。六甲山の基盤岩は花崗岩であり、「御影石」とも称され、利用石材としてはよく知

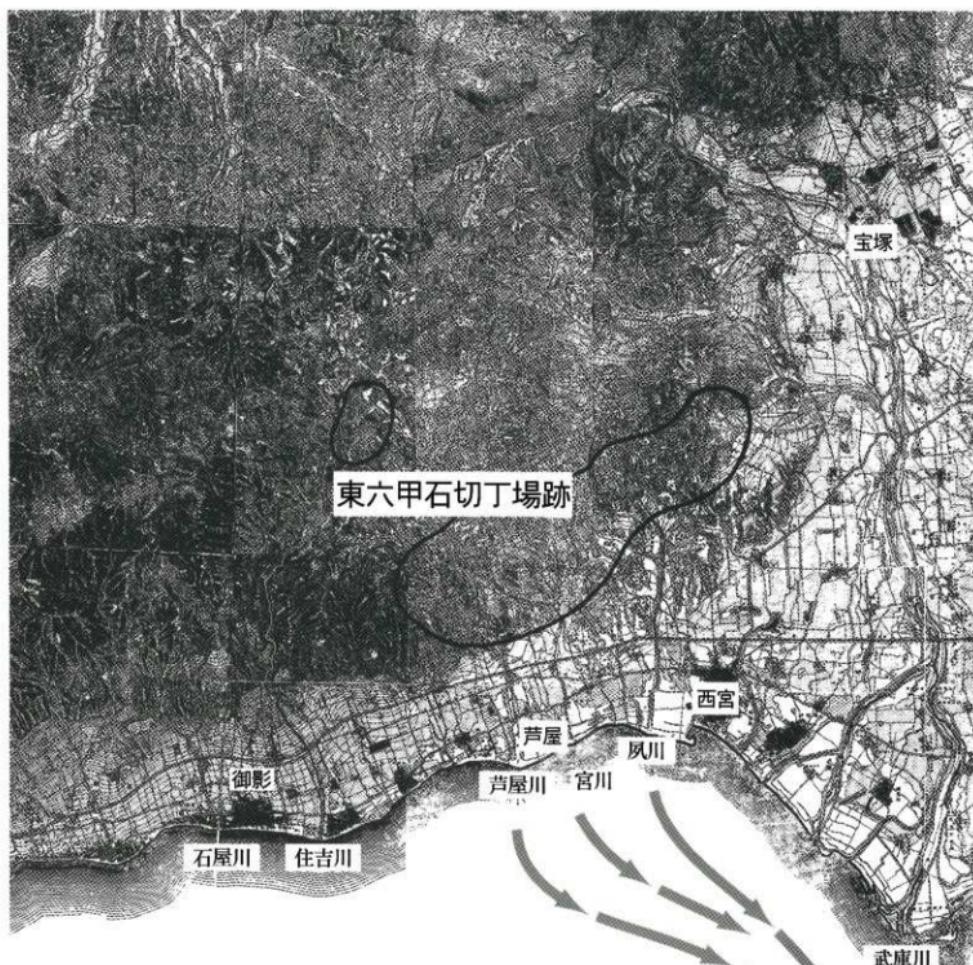


第10図 東六甲採石場における刻印群の分布（1/50,000）



第11図 六甲山地東南麓地域の地質概要図 (1/50,000 [古川・森岡・濱野ほか 2005 より引用、一部改変])

られた存在である。ただし、六甲山地を形成する花崗岩は単一ではない。芦屋川以西の山麓部に細長く分布する布引花崗閃綠岩がみられ、東お多福山・金鳥山付近では、島状に分布する古生層が存在する。そして残りの大半が花崗岩類で構成されている。これら六甲花崗岩は、中生代白亜紀（9000～8000万年前頃）に火山活動と関連して、地下のマグマがゆっくりと冷え固まったものである。その上に、新生代第三紀鮮新世～第四紀更新世（300～15万年前頃）の大阪層群と呼ばれる海成層が堆積する。古くに大阪湾海底にたまたま都厚い地層である。この間、氷期・間氷期を繰り返す気候変動とともに、約100万年前頃から東西の圧縮を受け、六甲山地を形成する隆起活動（六甲変動）が始まり、この山地生成過程において六甲断層系と呼ばれる多くの断層（六甲断層、五助橋断層、芦屋断層、甲陽断層、大阪断層、諏訪山断層、布引断層、湯ヶ森断層、須磨断層など）が生じている。かかる隆起に際して、



0

5km

第12図 德川大阪城と東六甲石切丁場の位置および海上運搬ルート



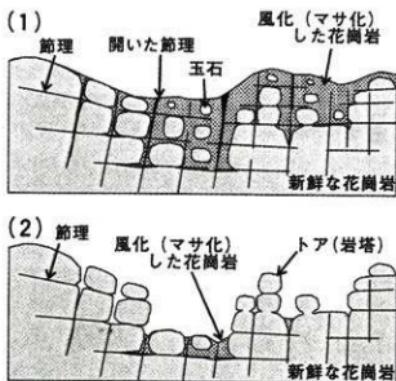
〔大阪歴史学会 2005 より転載、一部改変・加筆〕

古大阪湾に堆積した大阪層群がひきずられるよう  
に持ち上げられ、現在では陸上の高所部でも海成  
層が断続的に確認できるのである。

その後、およそ25～15万年前頃に山頂付近を  
はじめ、断層崖として露呈している花崗岩体の節  
理から風化・浸食が始まり、やがて崩落や流下が  
進んで大阪層群の被覆する山地斜面上に再堆積す  
ることとなる。これらはさらに段丘化し、古い地  
形面から段差をなくして平野部と接続しており、  
段丘疊層と呼称されている。段丘疊層中に二次  
的に移動した花崗岩塊が無秩序に包含されている  
が、大きさについては岩体段階の節理間隔の大小  
によって左右されるようである〔先山2003〕(第  
13図)。つまり、八十塚古墳群や東六甲採石場で  
は、基本的にはこの段丘疊層中の花崗岩転石を対  
象にすべて古墳の主体部を構成する石室用材や大  
坂城再築に伴う石材の採石活動を行っており、第  
14図〔池田1998〕に示されるように節理間隔の  
比較的広いエリアに属する当地域は、同じ六甲山  
系でも西六甲や裏六甲に比べ需要石材(石室用材  
や築石程度の法量)に見合う規模の母岩・母材を  
獲得できる地質環境を備え持っていたと言える。

一方、岩石学から見た六甲花崗岩は、「御影石」  
といふいわば建材としてブランド化した良質材の  
イメージとは異なる見解も存在している。興味  
深い指摘として、〔先山2005a 69p〕は、「六甲  
花崗岩は山陽帯ではまれな磁鉄鉱系花崗岩」であ  
り、「鉄鉱物が風化により水酸化鉄へと変化する」  
ことや、岩ヶ平で確認される花崗岩は「角閃石黒  
雲母花崗岩で、有色鉱物が集合する傾向」にあり、  
「有色鉱物集合部から風化が進む」ことを勘案す  
れば、石材としては「かならずしも良質とはいえない」と述べている。淡路島や小豆島など瀬戸内  
海島嶼部に属する領家帶花崗岩の特性と比較する  
と、岩質としてはやや劣るものと思われる。後に詳  
しくふれるが、花崗岩の表層から中心部に向  
かって風化するいわゆる「玉葱状風化」が観察さ  
れる機会が多いのもそのあらわれの一つと思われ  
る(図版14 下段右)。

(森岡・坂田典彦)



第13図 節理に沿った風化とバットランドの形成

〔先山2003〕

(1) 節理に沿って地下水などがしみ込み、そこからマサ化  
がはじまる。

(2) 雨などの作用でマサ化した部分が流され、新鮮な花崗  
岩がサイコロ状にとり残され、バットランドを形成す  
る。



第14図 六甲山地東部における六甲花崗岩の節理間隔

〔池田 1998〕

花崗岩の割れ目の規模を定量的に測定することは、大変難  
しいが、小割れ・中割れ・大割れの経験的分級がなされている。  
巨大割れ(3m以上)も含め、大割れ(1～3m)、中割れ(50  
cm～1m)、小割れ(50cm以下)を一つの目安とする。

## (2) 歴史的環境と芦屋

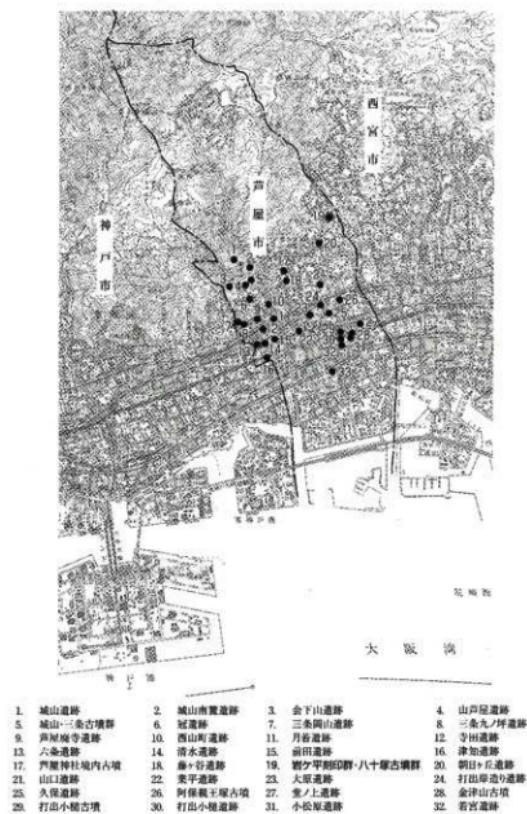
遺跡は一つ一つが隔離独立した存在ではなく、長い歴史の歩みの中で、地域にとけ込み、営まれた他の遺跡と深く関連し合いながら、消長をとげ、地上や地下に伝えられ今日を迎えている。この観点に沿いつつ、本節では、前段に市域の歴史を略述し、後段において今回の調査地周辺の遺跡などについて記述する（第15・17図）。

芦屋の歴史は、今から2万年以上前の氷河期に遡ることができる。芦屋川の左岸上流域に相当する奥山に芦有道路（芦屋－有馬間の連絡道路）を建設する際、標高320mの地点でナウマン象の臼歯が出土している。加えて、対岸の芦屋川右岸、城山の南西斜面に位置する山手小学校の東側でも象の牙が出土している〔武藤編1971〕。人類活動の痕跡がはじめて確認できるのは、こうしたナウマン象の活動時期とも一部重複する旧石器時代後期からである。紅野芳雄氏が「考古小録」〔紅野1940〕で紹介した岩園町採集の国府型ナイフ形石器をはじめ〔藤井1974・1976〕、朝日ヶ丘遺跡第1・2地点でも縄文時代の土器・石器とともに、旧石器時代後期の石器が出土している〔村川1966〕。また、翠ヶ丘台地上では、打出小槌遺跡（第4・22地点）で同様な国府型ナイフ形石器が発掘調査により検出されており〔大手前大学史学研究所文化財調査室1990、芦屋市1997〕、芦屋川右岸の扇状地間低地に立地する津知遺跡

（第4地点）では瀬戸内技法の翼状薄片が出土している。

縄文時代に入ると、草創期を除く早期から晩期までの遺跡分布が確認できる。早期の例としては山芦屋遺跡があり、押型文土器や石器が多数出土している〔森岡1982、関西大学考古学研究室1983〕。前期は先述の朝日ヶ丘遺跡において爪形文などを特徴とする羽鳥下層II式や北白川下層段階の土器が出土している。次いで、山芦屋遺跡S8地点では中期末から後期初頭に比定される磨消縄文を施す有文土器と無文土器が、狭小なトレンチ調査にもかかわらず多量に出土している〔森岡1996〕。後期末から晩期の遺跡に至っては、市域を縱走する芦屋川・宮川の形成する沖積扇状地上および扇状地間低地に点在し、若宮遺跡（第1・2地点）や堂ノ上遺跡（第20地点）、津知遺跡（第123地点）、寺田遺跡（第95・104地点）で確認されている。

弥生時代に入ると、遺構・遺物の分布地域は格段と増加する。前田遺跡（第20地点）では、近年クローズアップされているAMS法（加速器質量分析法）を採用し、前期内初期水田の動態に言及して



第15図 芦屋市内主要遺跡分布図